

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**  
**大学院生研究**  
**2005年度研究成果報告書**

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科	内山 節	印
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ <del>共同</del> 名
研究課題名	働く意識(仕事観、職場観、労働観)の差異は信頼構築に影響を及ぼすか?		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科	依田 慎	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2005 年度		
研究経費	200 千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

中国をはじめとするアジアに拠点展開する日系企業にとって、経営現地化が大きな課題とされている。現地化を実現するには、所属企業の経営思想に基づき、適切な経営判断をなす現地幹部社員の育成が急務とされているが、これがなかなか進まないとの問題が指摘されている。本研究では、現地中核人材の育成には幹部社員間の意味と意識の共有が決定的に重要であり、この実現の為に日常の高いレベルの信頼とコミュニケーションが必要であるとの立場に立ち、双方の交錯する働く意識と信頼構築の関係を量的、質的調査の両面で調べ結果を考察した。

**キーワード**(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 仕事の虫 ] [ アフォーダンス ] [ 非記号領域 ]

**研究成果の概要(図・グラフ等は使用しないこと。)**

この研究は人々の『働く意識』に焦点をあてて調査を行なっているが、この概念は必ずしも給与や報酬と直接結びついた仕事のみに限定せず、人間があるシステムに属し、然るべく役割を与えられて、目的を持って外界に働きかけを行なっている場合に、その行為に伴う意識の全体という、広義の意味での意識を採用した。このように考えたのは、働く意識というもの自体、それを醸成した社会の人間関係やコミュニケーションのなされ方と無関係では捉え得ず、そうなると勤務や労働という線引きの中にこの概念を封じ込めた上で、それを人間関係の構築と結びつけること自体が困難に思われたからである。

実際の研究では、中国に進出している日系企業の異文化の職場で共に働く人々の意識を調べ、その差異が信頼の構築にどう影響するかを追及した。すでにいくつかの先行研究でも語られている如く、日本人と中国人の仕事に対する意識や態度にはかなり大きな隔りがある。その隔りが様々な仕事のやり方の違いや、相手の仕事への不安を引き起こし、その行き違いから、相手をなかなか信じられない、任せようにも大事な事は任せきらない、ということが起きている。本研究の調査でもこうした状況が確認され、研究の仮説として掲げた「働く意識の差異は信頼構築に影響を及ぼす」は肯定された。

その差異を作り出す中身について、研究の中では主にインタビュー内容の分析から突っ込んで考察を行なった。現象として見えてきた内容を一言で表せば、双方の「あたりまえ」に食い違いが出てきているのであるが、この「あたりまえ」を形成しているものを掘り下げていくと、人類の登場以来、人間が生命体として周囲の環境とどのように関わってきたか、その関わりを持つ過程に人間自らが築いてきた文化や言語、思考方式などがどのように影響してきたか、そういった領域にある因子までを無視し得ないことに気づかされる。すなわち同文化の中においては「あたりまえ」の一言で済ませているものが、いかに長い歴史(有史以前を含む)の中で人間が環境との間に築いてきた奥深い関わりにおいて生じてきたものか、その相互関係を意識せざるを得なくなるのである。

この姿を分析していく段階で、「アフォーダンス」という概念を導入した。「アフォーダンス」は人間(や動物)が環境と関わる中で現れてくる意味のことで、別の言い方では「環境が人間(や動物)に提供する価値」とされる。同じ自転車が目の前にあっても、乗りこなすことが出来る人と、そうでない人とは、その価値が違う。長年乗りこなしてきた人にとっての自転車は、遠出を可能にしたり、駅まで行く時間を短縮したり、下り坂で気分よく風を切る爽快さを“アフォード”してくれる。それがその人にとっての自転車のアフォーダンスである。製造の現場に働く中国人と日本人の意識の差異はいくつかのレベルで表れてくるものであったが、究極的なところではこのアフォーダンスの差異と思われる面がクローズアップされた。

ある日本人総経理が中国には“仕事の虫”が居ない、とインタビューで述べたが、「アフォーダンス」の差というのはそんな形で仕事との向き合い方に現れる。例えば何らかの異常が見られた場合に、多くの日本人はその原因を極く自然に探ろうとする。どうしてそうなるのか、何で何で、という感じになっていく。それに対して中国人の反応はほぼ一律に、問題の解決を最優先に置く。原因追求が必要と思われる場合であれば、それを追求していくが、特に必要を感じられないのならば、部品ごと交換するなり、とりあえずマニュアルどおりに対応するなり、そういう対応がプロトタイプ的ななされていく。何度も現象を確認したり、図面とつき合わせて機械をいじり回したりするのは、単に非効率で無駄なこととしか見えてこない。それは中国の現場に居る日本人にとっては既に慣れきった彼らの反応ではあるが、現実の仕事の場ではこうした差異が、仕事の質そのものへの不信感へとつながり、結果として中々任せることが出来ない、とするひとつの重要な要因を形作る。

これは仕事を共にこなしていくときに、互いにもつ期待の姿や強さにも影響を及ぼしてくる。ある日本人エンジニアは、“日本であれば頼まれた仕事にプラス $\alpha$ をつけて返すもの”と語っていたが、この感覚をアフォーダンスの概念を持って捉えていくと、今度は日本人のユニークな仕事観の側面が見えてくる。すなわち、“頼んだ仕事にプラス $\alpha$ を付けて返す”人にとっての『頼んだ人』の存在とは「頼まれた仕事に対して、自分が並以上の配慮と技量をもって周囲に貢献できる人材であることを認めることをアフォードしてくれる相手」であるということになる。同様に、“自分の一歩前と一歩後ろを見て仕事をする人”にとって、その『前後で仕事を渡したり受け取ったりする』人の存在とは「自分がプロセスの全体をよく理解してその全体最適の中で適切な行動をとる人材であることを認めてくれる相手」であるということになる。

## 研究成果の概要 つづき

このように仕事が、常に周囲との関係性の中に捉えられ、そこに認められるある種の調和的な価値が自然に働くとの側面が日本人の働き方に観察されるのである。この調和を保つべく一方が頑張る中で、もう一方がそれを覚めた目で眺めている状態を思えば、両者の間に信頼が育つことが容易でないことにそう説明を要しないだろう。

こうした形の働く意識を見ていくなかで、もうひとつ注目すべきコインの別の面は、働く意識と共にある、その働く主体のアイデンティティの問題である。例えば上記した自転車を乗りこなせる人が、自転車のアフォーダンスを意識しているときに、彼(彼女)の中では、目の前のその自転車を自由に乗りこなす自分の技能が(無意識的に)確認されている。その確認は、当然過去に培ってきた自分だけの経験の蓄積を持って、身体の中にあるシステムの中に確認がなされるわけである。それは自転車の運転マニュアルを記憶しているというレベルのものではなく、自らの身体が確信しているレベルの確認となるわけであって、体が語る確かさを伴った自己確認ということが出来る。つまり、環境との関わり - とりわけ『働く』といった主体性をもった関わりにおいて、こうした自己確認が前提とされるものか否か、はその自分の内部に起きてくる精神性の問題が極めて重要な要素となりうるわけである。こうした捉え方が、おそらくは様々な技の伝承における心の在りようの追求、すなわち修行や修練といった捉え方の土壌を形成していたものと考えられるのである。

更に複数の人間が同じ現場で協働していくにあたって、しばしば互いが互いの動作を補いつつ、自らの仕事を果たしていくような場を考えた場合に(多くの製造業の現場ではこのような環境は極めて日常的なものであるが)、作業者同士で行なわれるやりとりは、おそらくは両者のアフォーダンスの共有度が高ければ高いほどに、正確かつ敏速に進めうると考えられるし、更に共に互いの動作を身体レベルで感じ取りあう中に、極めて複雑なレベルでの情報のやりとりがなされているものと考えられる。このアフォーダンスの交換と共有、微調整を含めた身体レベルの会話と合意が、ひとつの確たる『信頼』の感覚を形作りうるのではないのか。こうしたレベル、すなわち自らの身体が間違いないものとして信を与えた相手とは、大きな安心の元に仕事を進められる、そういう関係を構築しうるのではないのか。

木目を読み、その息吹を感じて仕事をする大工や、「鉄のメッセージ」を受け取って工夫に精度を与えていくプレス加工職人たち。彼らに見られるような、身体が直接素材のメッセージを受けて、正しいやり方を見出していくような現場の技能というものは、しばしば日本が誇る“ものづくり”の世界で語り草になる。しかしこの見方は片手落ちだ。実は明治以降に導入された西欧の技術とは、現場に軸を置く極めてユニークなたちで製造などの分野に根付いてきた。元来の仕事文化である素材との対話や、アフォーダンスにより身体が直接確信しうる方法と、西欧的知識体系はある意味絶妙なバランスで融合させてきたものと見ることはできるのではないのか。アフォーダンスに裏づけられた現場感覚と、整理された知見と理論、優れた方法論を備えた西欧的技術がうまく補いサポートしあう関係の中に、実は『ものづくり大国』日本の技術の大きな秘密が隠されているのではなかろうか。

この研究では、異文化コミュニケーション研究における最も重要な分野のひとつである、人々の「協働」に関わる取り組みを追及し、異文化との対比の中で切り出された日本人の「働く意識」の一面を示した。その成果は、今後の当該分野における研究に新たな視点を提示し得たと思われる。特に現在変化の最中にある中国を調査のフィールドとし、今まさに展開している日系異文化組織に働く人々の意識に近接して、自己と他者の双方の目に映るそれぞれの労働の姿を捉え分析しえたことにより、現に起きている様々な事象に対して納得性の高い説明を導けたものと考えている。

締めくくりの箇所では、ここに示した意識の相違を乗り越えて、よりよい「協働」の場を創造していくために、いくつかの提言を行なってみた。重要なことは異なった意識、異なったアイデンティティの姿を認め、共にそれを承認しあいながら成り立っていくしくみを追い求めていくことであろう。そのために本研究で示したモデルが、何らかの貢献を果たすものとなることを願い、論文の結びとした。